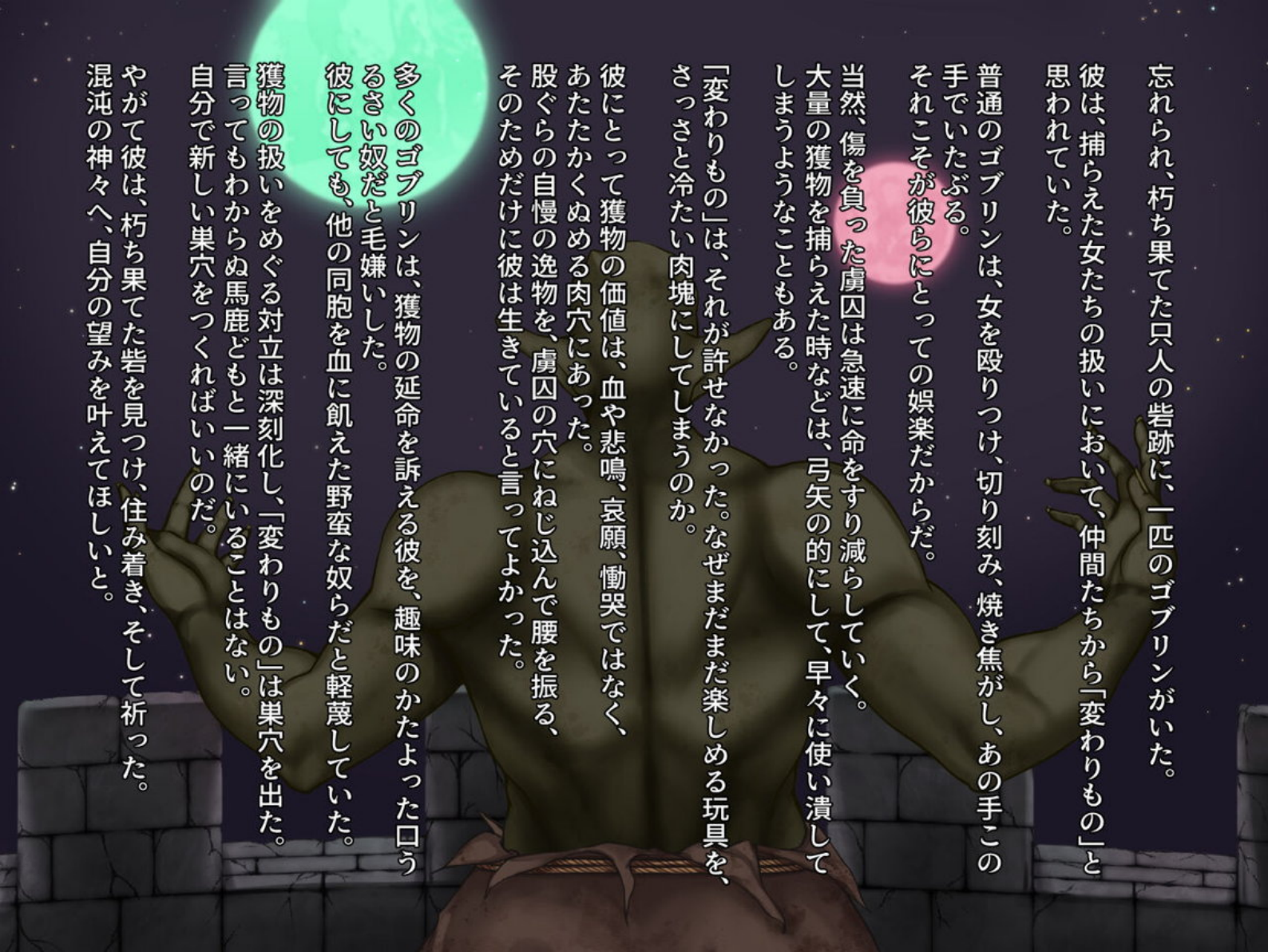
彼女のバッドエンド
邪神の首輪をつけられ、大型ゴブリンに囚われた彼女の末路は――



忘れられ、朽ち果てた只人の砦跡に、一匹のゴブリンがいた。
彼は、捕らえた女たちの扱いにおいて、仲間たちから「変わりもの」と思われていた。
普通のゴブリンは、女を殴りつけ、切り刻み、焼き焦がし、あの手この手でいたぶる。
それこそが彼らにとっての娯楽だからだ。
当然、傷を負った虜囚は急速に命をすり減らしていく。
大量の獲物を捕らえた時などは、弓矢の的にして、早々に使い潰してしまうようなこともある。
「変わりもの」は、それが許せなかった。なぜまだまだ楽しめる玩具を、さっさと冷たい肉塊にしてしまうのか。
彼にとって獲物の価値は、血や悲鳴、哀願、慟哭ではなく、あたたかくぬめる肉穴にあった。
股ぐらの自慢の逸物を、虜囚の穴にねじ込んで腰を振る、そのためだけに彼は生きていると言ってよかった。
多くのゴブリンは、獲物の延命を訴える彼を、趣味のかたよった口うるさい奴だと毛嫌いした。
彼にしても、他の同胞を血に飢えた野蛮な奴らだと軽蔑していた。
獲物の扱いをめぐる対立は深刻化し、「変わりもの」は巣穴を出た。
言ってもわからぬ馬鹿どもと一緒にいることはない。
自分で新しい巣穴をつくればいいのだ。
やがて彼は、朽ち果てた砦を見つけ、住み着き、そして祈った。
混沌の神々へ、自分の望みを叶えてほしいと。

彼が望んだのは、とにかく獲物が「長持ち」することだった。
どんなに大事に「使って」も、彼の底なしの性欲では、女たちの体力はいずれ尽きる。
定期的に補充ができればよいが、もしそれが叶わなかったら？
巣穴に女のいない日など、彼は一日たりとも我慢ならなかった。
ゆえに、一度とらえた獲物はできるだけ長く生かしておきたい。

そして、その願いを神は聞き届けた。

奇矯、というにはいささか嗜虐的すぎるその邪神は、
たかがゴブリンに与えるにはもったいないほどの呪具を、
彼にもたらしたのだった。

「…う……？」
女神官は頭に鈍痛を感じながら目を覚ました。
あたりはうす暗い。ここはどこだっただろうか…？
記憶をさかのぼろうとしてすぐ、彼女はずぶ濡れの体を震わせた。
そう、自分は川に落ちたのだ。ゴブリンスレイヤーとともに赴いた河岸の洞穴、そこに住み着いたゴブリン退治が終わった直後に。
足を滑らせた自分に向かって手を伸ばした彼の姿が、急流の水しぶきの向こうに見えたのが目に焼き付いている。
どうやら溺れ死ぬのは避けられたらしい。
周囲は古い石壁の塔の中と見え、朽ちた木の屋根は落ちて、彼女の周囲に散らばっている。
ぽっかりと開いた天井や出入り口から月の光が差し込み、廃墟に複雑な陰影を落としていた。
川から移動しているということは、誰かに助けられたということか。
もしかしなくとも、ゴブリンスレイヤーが水底から自分を救い出してくれたとか…？

ともかく起きあがろうと顔を上げた視線の先、
扉のない戸口に影がさした。
やがて「それ」が姿を見せた瞬間、女神官の顔は恐怖に引き攣った。
ゴブリン、いや、ホブゴブリンか。体格は、かつて戦った小鬼英雄にも
せまる巨躯。
「…ぃ…あ……ぁ…」

祈りの言葉すら紡げず、舌を震わせていたわずかの間に、
ゴブリンが女神官の体を掴み上げる。

「うぅ……っ!?」

胴体をがっちりと握られ、息がつまる。
醜悪な笑みを浮かべたゴブリンの顔が間近に迫り、
生臭い息がかかる。

「あ……」
ぐっしょりと濡れて冷たかった下着の中に
生暖かい感触が生まれ、足先へと流れ落ちていく。
チョロロ…

それに気づいたゴブリンはますます
笑みを深め、神官服に手をかけた。
「いやぁぁ…っ!!」
抵抗することもできぬまま、
鎖帷子のない腹部から下の布が
引き裂かれ、小水を吸った下着も
むしり取られる。
「やめてっ！　誰か…あっ!?」
ビッ
ビリィッ

汚ぶる
ゴブリンは女神官を逆さ吊りにすると、
両足を掴んで限界まで開かせる。
桃色の陰部がさらけだされ、ゴブリンにとっては
この上なくかぐわしい小水の匂いがたちのぼる。

いまだちょろちょろと流れ出るそれを、
ゴブリンのいびつな舌が舐めとった。

「ひぁっ!?」

その瞬間、電撃の魔術でも受けたかのような痺れが
彼女の全身を貫いた。

「(い、今のは…!?)」
ぴちゃっ、ぴちゃっと水音をたててゴブリンが股間を舐めまわすたび、下半身を襲う刺激に、彼女は混乱する。
間違いなく不快なはずのその行為がもたらしたのは、なぜか快感だったからである。
ペチャッ
ピチャ
ゾクッ…ッ♥
ぶるっ♥
彼女は知るよしもなかったが、身につけた者の生命力を絶えず賦活し、性感を強め、そして、痛みすら快楽に変換する、それが邪神が与えた黒い首輪の呪具の力であった。
女神官が意識を失っている間に起動した首輪は、今や染み込むように彼女の肌になじみ、禍々しく赤い光を脈動させていた。

「…ぁあっ!?」
ゴブリンの舌が性器の突起をかすめると、ひときわ大きな快感がはじけ、思わず嬌声をあげてしまう。
「なんで、こんなっ!?…いやぁっ!!」
彼女の反応に気をよくしたのか、ゴブリンは執拗に小さな肉豆にしゃぶりつく。
「っふ、ぁ…っ!…うぅ…っ!…っく、ぁあっっ!!」
せめて声をこらえようとしても、抑えきれない喘ぎ声がもれる。

腹に力が入ったせいで、最後に残った小水が噴き出す。
その源をゴブリンの舌が探り、
先端が尿道口をこじ開けて中に侵入する。
「あぁあああぁっっ!!?」
じゅぷっ
ビクンッ♥
ガクッガクッ♥
普通なら痛みを感じるだろう強引な舌遣いも、邪神の首輪の力で、
脳天を貫くような快楽へと変わる。
地母神の愛し子たる敬虔な女神官は、ゴブリンの舌によって
人生初の絶頂を迎えた。

「はぁっ…はぁ…っ…！」

ゴブリンが彼女の股ぐらから顔を上げると、
そこは唾液だけではなく、
彼女の奥から溢れた愛液でぬらぬらと光っていた。

トロ…

ビクッ♥

ビク…ッ♥

もはや辛抱たまらんとばかりに
ゴブリンは一声うなると、
脱力した女神官の胴を背中から掴み、
そそり立った肉棒を彼女の濡れた
秘裂にこすりつける。
並外れた巨根が、蜜に濡れて黒光りする。
「っあっ…いやぁっ…！
それは、それだけは…っ!!」
彼女の必死の抵抗も、
ゴブリンをよろこばせるだけで、
もはや意味をなさなかった。
先端がぴたりと割れ目にあてがわれ、そして――
ビク…ッ
くちゅ…

「あぎぃっっっ!!!」
女神官の純潔は、
一息のうちに散らされていた。
「ひぎゅっ、ぎぃ、あぁっっ!!!」
冒険者が使う棍棒のような太さの肉槍で
破瓜をむかえた激痛も、
首輪はすべて快楽に変換した。
ビクンッ♥
ガクッ♥
ずぶっ

眼は限界まで見開かれ、
桜色のくちびるからは想像も
つかないような喘ぎ声がほとばしり、
全身が意思とは無関係にがくん、がくんと跳ね、
肉穴と肉棒のわずかなすき間から愛液が噴き出す。
挿入と同時に女神官は、
早くも二度目の絶頂を迎えていた。
ビクビクッ♥
ビクンッ♥
プシャッ

「かはっ、は、ひゅっ…!!」
連続で昇り詰めた体はけいれんし、まともに息を吸うこともできない。
だがゴブリンはお構いなしに腰を振りはじめる。
「ぅあっ！んんっ！あぐっ!!ぁあっ!!」
どちゅっ、ぼちゅっという湿った鈍い音と、甲高い嬌声が廃墟にこだまする。
膣口ぎりぎりまで引き抜かれた肉棒が、次の瞬間には膣道を掻きわけて子宮口に叩きつけられる。
ビグンッ♥
ビクッ♥
ずぷっ
どちゅっ
ずちゅ

内臓を直に殴られるような衝撃も
激しい快楽に変わる。
だが生理的な反射までは変わらず、
反復(ピストン)運動に合わせて
口から反吐がまき散らされる。
「う、ぇえぇっ、げぇっ！」
胃液が喉を焼く不快感や臭気さえも、
まるで美酒を飲んだ時のような感覚へとすり替わる。
ガクガクッ♥
ごぽっ
ビクッ♥
ずぷっ
どちゅっ
ずちゅ

「ぁあっ！もぅ、やめ…っっ、ぅあぁっ!!!」
「GRRRRRR!!!」
目の前でチカチカと光が瞬くような錯覚。
全身の感覚が灼熱のような快楽だけに埋め尽くされ、
同時にゴブリンも子宮口めがけて射精した。
「〜〜〜〜っっ!!!」
声にならない叫びをあげ、絶頂の波に耐える。
溶岩のように熱い精液が、肉襞を舐めながら逆流していく感触で、
またしても絶頂する。
ビクビクッ♥
ビクッ♥
ドプッ

「っあぁぁ……ぁ…」
許容量を超えた快楽に耐え切れず意識が飛び、体だけがびくっ、びくっ、と断続的に跳ねる。
精液を吐き出し終えても、まだゴブリンの肉棒は硬く反り返り、意識のない肉体を貫いたまま、ぶら下げ続けていた。
ぶらん…
ぶら…
ビクッ♥
ビクッ♥

「……っ!!」
意識を取り戻してすぐ、寝転んだゴブリンと目が合う。下卑たニタニタ笑い。
彼女はゴブリンの腹の上で掴み上げられていた。
瞬間、先ほどまでのおぞましい記憶が蘇る。
ゴブリンに純潔を奪われ、なすすべもなく喘ぎ、身悶えたという事実。
怪物に犯され、感じていた――？
「わ、私に、何をしたんですか…!?」
絶対におかしい。そんなことがあるはずがない。女神官は訊かずにはいられなかった。
もちろん、答えが返ることはない。
ぐぐ…

返事の代わりにゴブリンはひょいと女神官を持ち上げると、
そそりたつ肉棒にうち下ろした。

「あぁぁっっ!!!」

ビクッ♥

ビクッ♥

どちゅんっ

下から子宮を押し上げられるすさまじい圧迫感が、
暴力的な快楽となって背中をかけあがり、脳髄ではじける。
衝撃で肺から押し出された空気を求めて、口がぱくぱくとうごめく。

「ORRRGG…」
肉棒をぎゅうぎゅうと締め付ける膣肉の感触に、
ゴブリンは満足げな唸り声をあげると、
至極ゆっくりと女神官の体を引き上げはじめた。
びくっ♥
「くぁ、ああ、あっ、あ…っ！」
亀頭の張り出しが、膣の襞を一つ一つ引っ掻いていくたびに、
生々しい感触が体の中で反響する。
乱暴に奥を突かれていた時にはわからなかった肉棒の形を、
膣肉が快楽とともに伝えてくる。
ぬるる…っ
びくっ♥

先端が膣口から抜けないぎりぎりのところで、ゴブリンは唐突に手を離した。
「んあぁ…っ!!」
ズッ、と重力に従って体重が肉棒にかかる。
膣圧が一瞬体を支えたが、愛液で滑りのよくなっている肉棒を徐々に飲み込んで、女神官の体は沈んでいく。
ぞくっ…っ♥
ぬぷぷぷ…
ぶるるっ♥
ビクッ♥
「ふぁ、あっ、あぁ…っ!!」
熱く硬いものが、体の中心をゆっくりと割り開いていく感触に陶然とする。
（気持ち、いい…っ）

小鬼にしてみればゆるやかな刺激であったが、
それが気に入ったのか、同じことを繰り返す。
「んぁ、ああ、あっ…ふぁ…っ」
ぞくぞくっ♥
ビクッ♥
身悶える女神官の吐息に、甘い響きが混じる。
快楽に麻痺した頭の片隅で、彼女は考えた。
なぜ、これまでの人生で一番、気持ちいいと感じるのか。
ぬるー!!っ

（なにかの薬か、術の効果…？
それとも、まさか私が、最初から…）
――怪物に犯されて悦ぶ、異常者だった…？
首輪の存在を知らない彼女には、なにが正解かわからない。
ただ体を支配する快感だけが、事実としてそこにあった。
ビクンッ♥
びくびくっ♥
ずぶ…っ

弱い刺激に飽きたのか、ゴブリンは女神官の体をしっかりと掴むと、上下に揺さぶる。

「あぅあああああっ!!」

先ほどまでとは違う乱暴な動きに、女神官は髪を振り乱して喘ぐ。

ずぷっ

ずちゅっ

ビクッ♥

ずちゅっ、ずぷっという水音が響き、それにあわせて女神官の愛液まみれの尻肉がゴブリンの下腹にぶつかる、べちん、べちんという鈍く湿った音が混じる。

「あぁっ！　いぎっ！　ぁはっ！　んあっっ!!」

ゴブリンの腕力で子宮口を突き上げられるたび、絶頂へと近づいていく。同時にゴブリンの逸物も射精が迫り、いっそう張り詰めて大きさを増す。

ビクッ♥

「あぁあああああああっっ!!!」
体が浮き上がるほどの衝撃で、女神官の最奥に精液が叩きつけられ、
目の前が真っ白になるほどの快感がはじける。
ビクッッ♥
ビクッッ♥
快楽の大きな波が、二度、三度と押し寄せて止まらない。
「あっ、うあ、あっ、あ…っ」
肉棒に貫かれたまま、がくがくと体を震わせ、
喘ぎ声をもらすこと以外、彼女にはなにもできなかった。
ドプッッ
ガクガクッッ

全身は力を失い、前のめりにゴブリンの胸へと倒れ伏す。
ごぽんっと鈍い音をたてて、精液まみれの肉棒が抜け、
その衝撃でまた小さな快楽の波が生まれる。
ビクッ♥
ゴポ…ッ
ガクッ♥
びくん、びくんと蠢く体から、どぷ、どぷ、と
断続的に精液が押し出される。
「GRRRRR」
ゴブリンは満足げに息をもらすと、
女神官を腹に乗せたまま眠りにつく。
女神官は朦朧とする意識のなか、
(ゴブリン、スレイヤー、さん…)
ただその人の姿を思い描いて、
気を失うように眠りに落ちていった。

ゴブリンは陽が沈むころに目を覚ました。
寝ている間に何度か獲物が逃げようとしたせいで起こされたが、
それでも彼は上機嫌だった。
なにせ邪神から首輪を賜ってすぐに、
川辺で只人の女を拾うという幸運に恵まれたのだ。
これからの生活を思えば、眠りが浅くなるなど大した問題ではない。
それに、起こされた苛立ちまぎれに、指を尻に突っ込んでやったら
逃げなくなったので、これからはそうすればよい。
それよりも、今は腹が減った。
長く楽しむには、獲物にもしっかり食い物を与えなければならない。
後の問題は、獲物を拘束しておく道具がここにはないということだ。
食い物を探しに出掛けている間に逃げられてはたまらない。
とすればいっそ持ち運ぶか？
しかし、何かの拍子に逃げられるということもありうるし、
だいいち手が塞がっていてはなにかと面倒だ。
さて、どうするか。
思案しながら腹の上で眠る女を見る。
さらにその向こうには寝起きでそそり立った自らの肉棒。
その瞬間、彼の脳内には
ゴブリンらしい悪辣な発想が舞い降りていた。

ずしん、ずしんと足音を立てるたびに、
心地よい刺激が股間から伝わる。

おまけに、女があげる悩ましげな声も、顔の下からよく聞こえる。
獲物を肉棒で貫いたまま、自分の体にくくりつけて運ぶ、
という思いつきに、彼は非常に満足していた。

縛るための紐は女の服を裂いて作ったから、無駄がない。
歩きながらも、肉穴の上の豆粒や、
胸のふくらみの先端を指でつまんでやれば、
びくんと体を跳ねさせる女の反応を楽しむことができる。

一番近い只人の集落でもそれなりに距離があるが、
移動中も飽きずにいられそうだ。

そうしてしばらく森の中を歩くうちに、只人が作ったであろう道が
木々の向こうに見えてきた。
ここを行くのが一番楽ではあるが、
武器を持った冒険者どもと出くわす、などという面倒も起こりうる。
やはり森の中を行くべきだろう。

彼が再び歩き出そうとしたとき、
道の向こうから物音が近づいてきた。
どうやら荷馬車の音らしい。
彼はニヤリと口元を歪ませ、手に持った棍棒を握り直した。

まずは道の脇に潜んで様子を見よう。
冒険者の一団などといった手合いでなければ上々だ。
人里まで行かずとも、早々に食事にありつけそうだ。

そんなことを考えていたために、
ゴブリンは女神官が身じろぎしたのに気づかなかった。
「…逃げてください!!　ゴブリンが――!!」

なにごとか大声で叫んだ女の口を慌てて塞ぐ。
おおかた助けでも求めたのだろう。
だがいまさらだった。蹄の音は近い。
こうなれば出ていって棍棒を叩きつけるのみ。

木の間をくぐり抜けて道に躍り出ると、横なぎに棍棒を振り抜く。
棍棒は荷車の側面をとらえて、横倒しに吹き飛ばした。
乗っていたのは御者台にいた男のみだったらしく、
悲鳴をあげて荷物もろとも土の上に投げ出される。
一丁上がりだ。
馬一頭、只人の男一匹。さらに荷物も、匂いから察するに、
只人の食い物を運んでいたらしい。
なんたる僥倖。食事とエサの問題が一気に片付いた。

「ぅあ…、逃げ、て…！」
女が身をよじって男に向けて何か叫んでいる。たぶん助けて、とかなんとか言っているのだろう。
だが男のほうは、尻餅をついたまま、怯えた顔で震えているだけだ。
ふと、彼の頭に素晴らしい――ゴブリンにとってはだが――思いつきが浮かんだ。
この腰抜けの目の前で、同族の女をよがり狂わせてやったら面白そうだ。
男が哀れにも立ち向かってきたら、棍棒で潰してやろう。
卑怯にも逃げ出したら、臆病者と笑ってやろう。
ビクッ♥
ビクビクッ♥
ぶる…っ♥

濡れた肉穴の締め付けも、突くたびにあげる嬌声も、初めて犯した時から力を失っていない。

げに素晴らしきは邪神の首輪。普通の獲物ならば、自分が半日使っただけで半死半生になっているところだ。

「いやぁあっ！　あぅあっ！　見な、いでぇ…っ!!　ぁあっ!!」
どちゅっ、ごちゅっと湿った肉のぶつかる音が森に消えて行く。
鷲掴みにした体は熱を帯びて汗をかき、
手のひらに吸い付くような心地いい感触を伝える。
ビクッ♥
ビクッ♥
ごちゅっ
ずぷっ
ずちゅっ

「んぁっ！　ぁあっ！　あっ！あぁっ！あっ!!」
射精感の高まりを感じて、ゴブリンは動きをさらに早くする。
そして――
「あぁあぁぁあああっっ!!!」
ビクッッ♥
ビクッッ♥
ドプッッ
びゅるっ
肉壺の一番奥に精液をぶちまける。
肉棒を食いちぎるかのように締め付けてくる女の穴から、
ごぼりと白濁液があふれ出して、びちゃびちゃと地面を濡らし、
跳ね回る体から汗のしぶきが飛ぶ。

鼻先で踊る髪からたちのぼる濃厚なメスの匂いに、満足して萎えかけた肉棒が、たちまち硬さをとりもどす。

「…ひぎゅっ!? あぅっ！ ぅうっ!!」

女の腹に満ちた一度目の精液を掻き出すように、さまざまに角度を変えながら、ねっとりとした動きで出し挿れする。

獲物の反応からすれば、まだまだ楽しめそうだ。

視界の端で男が逃げて行くのが見えたが、無視して目の前の楽しみに集中することにしたのだった。

「…ん……」

女神官は何度目かもわからない目覚めをむかえ、うっすらと目を開いた。

目の前には、醜悪なゴブリンの顔。

「……っ」

どうやら掴み上げられた感触で覚醒したらしい。

眼下には、もはや見慣れた肉の槍。

もはや抵抗する気力も湧かない。

ゴブリンはゆったりとした動作で、女神官の股間を肉棒にこすりつけ始める。

「…ぁっ、んんっ…、く…っ」

肉棒が槍の穂先だとすれば、
自分は手入れ用の布と油のような有様だ。
いつの間にか染み出した愛液が、怒張をいやらしく光らせる。
ぼこぼこと血管の浮いたそれで、秘裂の先端の豆をこすられると、
こらえきれない吐息が漏れてしまう。

「ふぁ…っ、ひぅ、んん…っ！」

ぬちゃ…

ずりゅ…

ぬち、くちゅ、と、ねばついた卑猥な水音が羞恥心を煽り、
みるみるうちに体が熱くなる。
その熱で溶け出したかのように、
さらに愛液が溢れ出して滴っていく。
受け入れる準備はできていると言わんばかりに、
ぽってりと腫れた入口がヒクヒクと震えるのを、
他ならぬ自分が感じる。

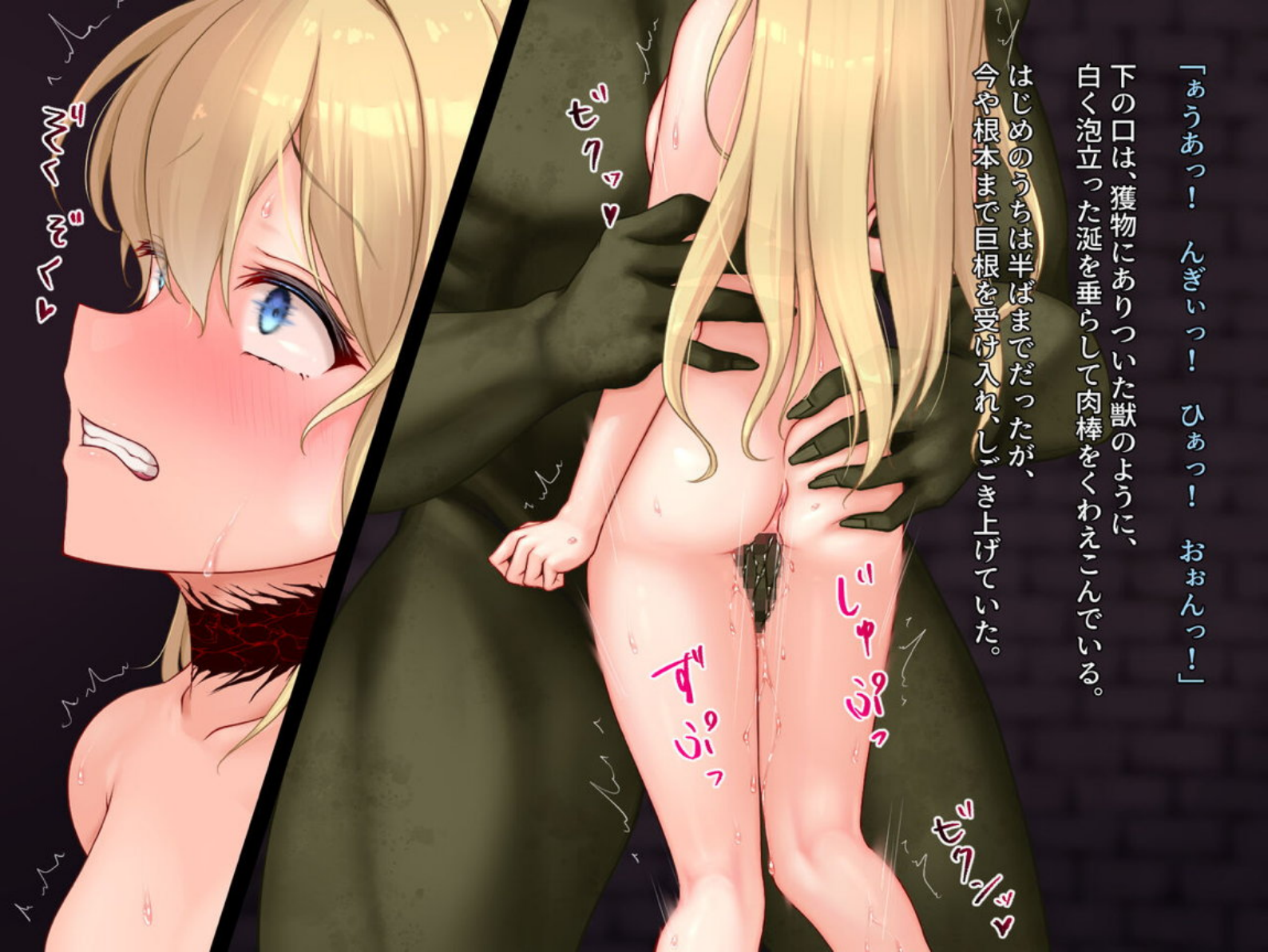
（はやく、ほしい…）

びくっ♥

そく…っ♥

「……？…!?」
一瞬よぎった心の声に、女神官は愕然とした。
うそだ。そんな。
でもいま確かに、私は…

そんな彼女の乱れた内心など知らず、
ゴブリンは無造作に槍を突き入れる。
「ふぁあああああっっ!!!」
ぞりゅりゅ、と肉襞をかき分けられる感触。
次いで最奥を突き上げられる衝撃。
ずぶっ
ビクンッ♥
先ほどまでの葛藤は消え失せ、真っ白な快楽が心を支配する。
体を揺さぶられて肉棒が出入りするたびに、
雷撃を浴びたように体が跳ね、
口からは自分のものとは思えない嬌声が絶え間なく響く。
ビクッ♥


「ぁうあっ！　んぎぃっ！　ひぁっ！　おぉんっ！」
下の口は、獲物にありついた獣のように、
白く泡立った涎を垂らして肉棒をくわえこんでいる。
はじめのうちは半ばまでだったが、
今や根本まで巨根を受け入れ、しごき上げていた。
ビクッ♥
じゅぷっ
ずぷっ
ビクンッ♥
ぞくぞく♥

「あっ！ぅあっ！ひぅっ！あっ！あぁっ！」
ゴブリンの腕に力が入り、反復（ピストン）運動が早くなる。
それだけであっという間に昇り詰めてしまう。
歯を食いしばって耐えようとしても、圧倒的な快楽が腰で爆発し、
あっけなく絶頂を迎える。
「ひ、ぐぅぅぅぅっ!!」
だが、ゴブリンはまだ達していない。
「…あぎっ！　いまっ！　らめぇっ！　いやぁっ!!」
絶頂しながら更に責め立てられ、視界が白く明滅する。
さらに、
ビクッ♥
ずぷっ
ぬちゃっ
プシッ
ガクッ♥
ガクンッ♥

「あぐぅっっ!?!?」
いつの間に手にしていたのか、
尻穴に女神官の錫杖が突き入れられる。
「ふぐぅ…っ！　ぅあっ！　んおっ！」
石突の起伏が、肛門や腸壁をごりごりと刺激し、
肉壁ごしに肉棒とこすれあう。
ビクッ♥
ぐちゃっ
ずぶっ
ビクッ♥
ビクッ♥

「ひぎぁっ！　いひぃっ！　ぅあぁっ!!」
前後の穴から押し寄せる快楽の波が合わさり、激しく脳を揺さぶる。
女神官は思考もままならず、ただ快楽を感じ、獣のように喘ぐだけのモノに成り果てていた。
「ぁひぅっ！ひぎゅっ！あ、あっ！あっ！」
ゴブリンの動きが早くなる。
ごちゅっ
ごりゅっ
びくっ♥
ぞくっ♥
ぞくっ♥

「んぁああああああっっ!!!」
腹の中で小さな爆発でも起きたかのような熱と衝撃。
意識を白く塗りつぶしていく、かってないほどの絶頂。
「ぁ……っ、…お……」
ビクッ♥
ドプッ
ゼュグッ
ビクッ♥
限界を超えた体は、口から泡を吹き、快楽の余韻で断続的に跳ねる。
びく、びくんと体が震えるたびに、尻に突き刺さった錫杖が
しゃん、しゃんと音を立てる。
その錫杖を手に、懸命に戦ってきた女神官の凛とした姿は、
もはやどこにもなかった。
ビクッ♥
ぶるる…っ♥

嗅ぎ慣れた、しかし懐かしくも感じる臭いが鼻をかすめ、
ゴブリンは目を覚ました。

同族と洞穴で暮らしていたときにはよく嗅いだこれは、血の臭いだ。

体を起こすと、かたわらの女は既に目を覚ましていたようで、
何かうわごとのようにつぶやいていた。
見て分かったが、血は女の股から滴っていたらしい。
これまでの経験で、さらったばかりの女が股から血を流していたことがあった。
どうも只人の女とはそういうものらしい。
ぞくぞっ♥
ぞくぞっ♥
ただその理由については見当もつかなかった。
血を流すからには、何かしらの不調だろうか。
とすれば、今日は女の使用を避けるべきか？
いや、久々の血の匂いに興奮した下半身はとっくに隆起している。
目の前に血でぬめる穴があるというのに、我慢などできるだろうか？

そんな葛藤をしていると、
いつの間にか女が肉棒に顔を寄せていた。
なんのつもりかと見ていると、
ぞく…♥

「は、ん…れる…」
愉快なことに、自ら肉棒に舌を這わせはじめるではないか。
どうやら己の境遇を受け入れて、
一匹のメスとして楽しむ気になったらしい。
ぴちゃっ…
ぬる…

「ん、ちゅ、じゅる…」
根本から先端へ、小さな舌で丹念になぞり上げていく。
ぬるる…
くちゃ…

肉棒全体が唾液にまみれて、
あやしげに光るまで舐めてから、女は口を離した。
唾液の糸が肉棒と唇の間を一瞬だけつなぎ、ぷつりと落ちる。
荒くなった吐息が肉棒をくすぐる感触にいい加減にじれったくなり、
ゴブリンが獲物の腰を掴もうと動いた瞬間、女が体勢を変えた。
ぞくっ♥
ぞくっ♥
ちゅぱ

くちゅ…っ
ぞくぞくぞく

「く、あっ…！」
体重がかかり、少しずつ肉棒がめり込んでいく。
心なしか、いつも以上に肉穴の中が熱く絡みついてくる。
ビクッ♥
ビクッ♥
ぬぷ…

「んんっ…ぁあああっ!!」
一際大きな喘ぎ声とともに、肉棒が根元まで飲み込まれた。
挿れただけだというのに、肉穴全体がしごき上げるように痙攣し、
豊かとは言えないがしっかりと
丸みを帯びた尻肉がふるふると揺れる。
ビクッ♥
ずぷぷぷっ
ぐちゅんっ

女が腰を上下させ始める。
あらゆる体液でねばついた肉棒が、
ずるりと露わになったかと思えば、再び肉壺の中に沈んでいく。
「ごめん、なさい…、地母神、さま…っ！　わたし、こんなぁ…っっ！」
少しずつ腰づかいが、自らの最奥に杭を打ちつけるように激しくなっていく。
「ごぇ、なさぃ…っ！　きもち、いいです…っっ！　んああっ!!」
そして、ひときわ勢いをつけて腰が叩きつけられた瞬間、
女の体は爆ぜるように跳ねた。

「んぁあああああっっ!!!」
ぎゅうぎゅうと食いしばるかのように締め付ける肉穴の感触に、
ゴブリンは思わずうめいた。
このままじごき立てれば、すぐにでも射精しそうだ。
だが、女は断続的に体を震わせるだけで、催促するように尻をつついてみても動き出す気配がない。
こちらを満足させる前にへばるとは、どうやら仕置きがいるらしい。
ゴブリンは醜悪な笑みを浮かべると、
ビクッ♥
ビグンッ
プシッ

「あぎぃっっ!!?」
尻を鷲掴みにして、親指を尻穴に突き入れる。
前の穴に肉棒が収まっている感触が、肉壁越しに伝わる。
締め付けもさらに良くなったので、尻穴をぐにぐにといじりながら
腰を持ち上げて、叩きつける。
ビクッ♥
ビクッ♥
ずぷっ
ぬるるっ!!っ

「あぎゅっ！　ぁがっ、いぎぃっ!!　ひぃあぁっっ!!」
ゴブリンの下腹は女の色々な汁で水たまりになっていて、
尻を打ちつけるたびに、ばちゅん、ばちゅんとしぶきが跳ねる。
女の口からは獣の咆哮じみた喘ぎ声。
すさまじい締め付けに、あっという間に限界が近づく。
ビクッ♥
ビクンッ♥
ずちゅっ
ごちゅっ

「〜〜〜〜〜〜っっ!!」
尻を押さえ込むようにして、最奥に白濁を注ぎ込む。
衝撃で息が詰まったのか、
女は声にならない絶叫をあげながらびくんびくんと身悶えする。
その律動がさらに射精を促し、
最後の一滴まで搾り取ろうとするかのようだ。
ビクッ♥
ガクンッ♥
ビュッ
ドプッ

尻を持ち上げると、ごぽんと音を立てて肉棒が抜け、
ぽっかりとあいた穴から、白く泡だった汁が大量に流れ落ちる。
我ながらよく出したものだ、とゴブリンは口の端を吊り上げると、
白い滝が完全に止まるまで、そのさまを眺めていた。

気づけば女神官は白い光の中にいた。

体はふわふわと浮遊感に包まれて、現実味がない。

自分は何をしていたのだったか、と考えてみても、

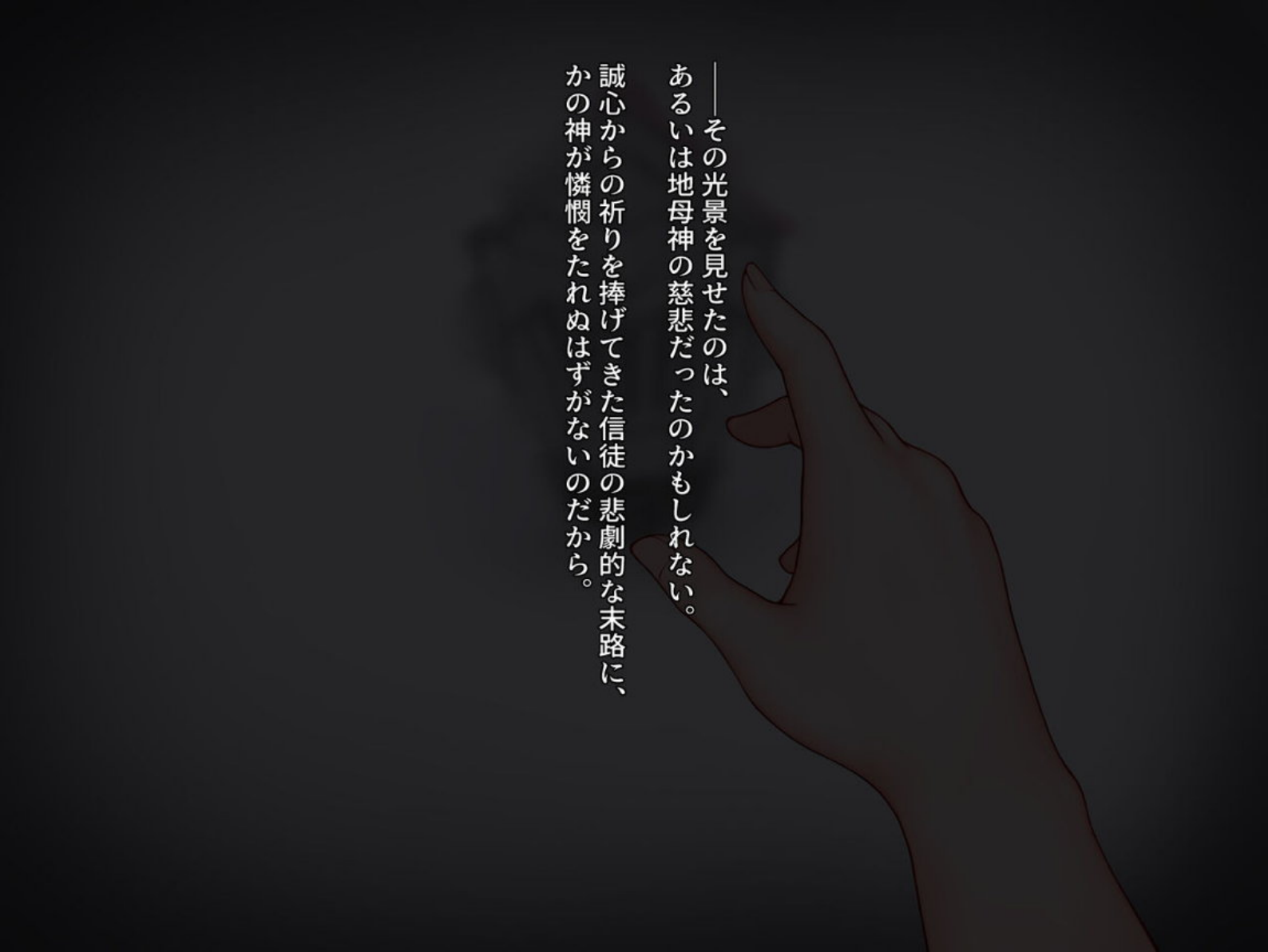
曖昧な意識では答えに辿りつかない。

ふと、光の中に浮かび上がるものがあった。

それは見慣れた鎧兜の姿で。

（あぁ…来て、くれたんですね…）

なぜかとても懐かしく思えるその人に、
彼女は手を伸ばして――



――その光景を見せたのは、
あるいは地母神の慈悲だったのかもしれない。
誠心からの祈りを捧げてきた信徒の悲劇的な末路に、
かの神が憐憫をたれぬはずがないのだから。

もはや精神は現実から解放された女神官の肉体は、
多数のゴブリンによって弄ばれていた。
小型のゴブリンは全て、彼女の胎から生まれ落ちたものたちである。

子が母を犯し、また子が生まれる、
おぞましき混沌の狂宴。罪もない少女が堕ちた無間地獄。
いつか本当に、救いの手が差し伸べられるのか。
それはまだ、神々も知らない。